

巻頭によせて

院長 丹野 三 男

仙台市立病院医学雑誌第3巻の発刊にあたり、新病院へ移転後の病院の業績を振り返り、巻頭の言葉としたい。

昭和55年7月に新病院での診療を開始してからまる2年を経過し、全職員は新しい環境にもすっかり慣れ、多忙の中にも落ち着いた気持で毎日の仕事が出来体制が次第に整ってきた。

昨年1年間の患者統計をみると、1日平均外来は約1,000人、入院は約430人であり、いろいろな検査件数あるいは手術件数を始め、各部門の業績も着実に伸びており、しかも診療内容が極めて深くなり且つ専門的になっており、当院の目指す二次病院の性格が実現されつつあることがうかがわれる。また学会発表や数々の勉強会も定期的に夜おそく迄行われており、自画自賛かも知れないが病院全体に極めて活力の溢れる雰囲気は漂っていると思うのである。

昨年の患者死亡数は233名で、55年に比し76名も多く、その中106名と半数近く剖検を行っており、病床数からみて仙台市内の病院では最も多くの死亡例を取り扱っており、いかに多くの重症患者を診療しているかが推定されよう。

一方当院診療の大きな柱である救急医療は、入院を要する二次救急の方向に進んではおるが、空床確保の困難さ等から充分に対応出来ない悩みもあり、また一次、二次の連携がまだまだ円滑でないため、数々のトラブルも経験しており、これからの大切な課題と考えられるのである。

当院への市民の期待、要望はあまりにも多方面にわたっており、また昨今医療に対して倫理的にもあるいは財政的にも、世論は相当厳しいものがある。我々は反省すべきものは謙虚に受けとめなければならないが、最近の医療は昔の如くには決して単純なものではなく、各方面のもろもろの配慮がなくては良い医療を全うすることが出来なくなっており、従来の医師と患者との個別的な倫理だけでは解決出来ない多くの問題を抱える時代になってきたと思うのである。

すなわち医療に携わる職種が極めて多種類にわたってきたこと、めざましい医学の進歩、例えば驚く程の延命が可能になり、臓器移植を始めとする高度の医術が実用化し、遺伝子工学の発達によって人間の生命についての価値観にも影響を及ぼすようになってきたこと、医療を受ける患者側の要望、選択も極めて多種類になってきたこと等から医療が非常に複雑になってきており、今迄の古典的な医師の倫理のみでは律し切れない時代と考えられるのである。

ここに医学の倫理、すなわち病院では医師を中心として看護婦やコメディカルの人々の、更には院内に働らくすべての人々の倫理感が求められるようになり、またその内容も単に精神的な面ではなく、技術の優秀さも問われるようになってきておるのである。特に強調されなければならないこ

とは、医療側だけではなく、医療を受ける患者側の、医療体制や財政に深く関与する行政の人々の、更にはマスコミや製薬会社、医療機器メーカーと広範囲の人々の倫理感に支えられてこそ真の医療が行われると考えられてならないのである。

当院医誌の巻頭によせて、毎日の病院生活を通して院長として考えさせられることの一端を述べた次第である。

(昭和 57 年 6 月 30 日)